・第三章　肛門（科）が極度の羞恥語の証明
・第四章　「痔」とは何ぞや
・第五章　旧ドイツ医学のプロクトロギー音痴の証明
・第六章　西欧プロクトロギー正史
・第七章　本間事件
・第八章　アメリカの大躍進
・第九章　近世日本プロクトロギー悲惨史
・第一〇章　観念論中国プロクトロギー
・第一一章　三大肛直疾患
・第一二章　在来診は想像診：西欧プロクトロギーの歴史的欠陥、シャガミ&イキミ論（三枝純郎）
・第一三章　羞恥心と外括約筋群
・第一四章　排便阻止三段構
・第一五章　今は昔
・第一六章　日本人の三大業績
・第一七章　結語

この案内を書いている小生は、著者三枝純郎氏の一才下であるが、氏の情熱には圧倒される思いである。

ドーランド医学大辞典にエイナス（Anus）なる語はさけられている。プロクトロギー（著者のいう下部消化器ないし大腸排泄科）の説明にである。代りに直腸が使用されているという。小生はかつて泌尿器科を七ヶ年ほど学んでいるから、毎日前立腺の直腸診をしていた訳であるが、肛直なる概念でエイナスに指を差し入れていたことはないし、外括約筋群の解剖生理を考えながら診療したこともない。まさに恥かしながらである。小生の年代では学生時代に、ヘモロイドの硝酸銀局注療法、ホワイトヘッド氏手術を知ったのみであったから、三枝氏が「肛直管」を声を大にしてさけばれている姿に驚異を感ずるし、氏の永年の研究に敬意を表する次第である。医師にもすすめたい啓蒙的な専門書である。

（中西　淳朗）

〔羽衣出版有限会社、静岡市駿河区敷地一―二―十五、電話〇五四―二三八―二〇五一、Fax同じ、B五版、二三四頁、カラー写真八頁、九〇〇〇円・税別〕

川村　純一　著

『文学に見る痘瘡』

天然痘ウイルス感染症であるこの病気には痘瘡、天然痘、疱瘡、いも、まめ、椀豆瘡などなど、多くの呼称があるが、ここでは著者に習って痘瘡とする。この病気の呼称が多様であることは、すなわち痘瘡は人々に非常に身近な存在であった証拠であろう。この痘瘡について川村純一先生が前作『病いの克服―日本痘瘡史』に続いて、この度『文学に見る痘瘡』を上梓された。

痘瘡は、エジプト王ラムセス五世のミイラに残る瘢痕がDNA鑑定の結果、天然痘ウイルス感染症であることが証明されたことによっても分かるように、人類が集団生活を営むようになって以来人類と共にあった疾患と考えられている。

その痘瘡について日本でも、日本書紀を初めとして日記、随想、物語などに多く記述されてきた。痘瘡がそれだけ人々の日常生活に密着した疾患であったばかりではなく、多くの人の命を奪い、治癒後には顔に瘢痕を残すことなどによりその後の人生に陰を落とすなど、語るに足る存在であったことを示すものであろう。

人々は生病老死の中で常に痘瘡を見、恐れ、悲しみ、嘆き、喜び、苦しみを共有していた。川柳、浄瑠璃、俚言、草紙、物語、民間医学知識などから情報を収集したこの著書は痘瘡について百科事典的記述となっている。八丈島や竹島、種子島などの離島で発生し、全島民を巻き込んだ流行、蝦夷地開拓と共に起きた流行とアイヌの行動、それからもたらされた悲惨な結末、小林一茶の子「さと」の罹患、大槻家の経験等々、その題材は尽きるところがない。

わが国に於ける流行の詳細な記述は日本書紀に始まる。天平七年八月、筑紫に始まり京へ上り、多くの宮廷人を襲った禍々しい災厄。藤原一族に続いて敏達天皇も罹患された。蘇我入鹿、物部守屋が活躍した飛鳥時代、仏教伝来に伴って起きた流行、疾患平定のために各地の神社に祈祷を行わせ幣を捧げ、大赦を発令した記録など、それだけで壮大なデテクティブストーリーを読むような緊迫感がある。

痘瘡は多くの場合、外来疾患であった。痘瘡をもたらすものとして痘瘡神を考え、これに対して神まつりが行われた。痘瘡が流行した時には痘瘡神のご機嫌をとるために丁重に神を迎え、流行が終わった後には村はずれまで送り出す、その儀式も各地で行われ、だんだん様式化され手順が複雑化していく。

第三代将軍・徳川家光公も痘瘡に罹患された。徐々に華美になっていく酒湯などの儀礼に簡素化の命令が出されるなど、当時の生活をかいま見ることができる。

痘瘡に罹患された歴代天皇とその年齢、寿命も分析されている。これを見ると痘瘡は庶民では子どもの病気であったが、天皇の罹患年齢は意外に高齢である。幼時は深窓で育ち病から隔離されていたが、天皇となり多くの人と接触し罹患したのであろう。結局、痘瘡は一生のいずれかの時期に罹患する「役」であった。

川柳　「いもの神にほれられ娘値が下がり」「算盤を出してあばたを仲人する」など外見が女の値を決めるのは江戸時代ばかりではないが、実家からもやっかい払いをされた娘の将来はどうであったか。

大槻盤渓の孫の痘瘡による死と盤渓の反省、人痘法そして牛痘法へと向かった当時のインテリの思考過程。伊東玄

朴が実行した人痘法。無事終わった時の安堵感が行間に読み取れる。信州の在に住む小林一茶家にも悲劇が襲った。日録風句文集『おらが春』に書かれている娘「さと」の罹患と酒湯行事など、子を失った親の悲しみに心を打たれる。飢餓、貧困、無知、疾病に翻弄される人々…「つゆの世ハつゆの世ながら　さりながら」。

一方疱瘡から治った子どもは「町屋迄笑いの通る三番湯」と元気の良い笑い声をたてた。

明治になって、夏目漱石はイギリスに留学した。儒教的な倫理観、東洋的美意識や江戸的感性を持つ漱石が日本人としてのアイデンティティと顔に痘痕のある一東洋人として外国で生きることは、どのような心理的負担を強いるものであったか。『吾輩は猫である』の記述を読むと心痛む思いがする。

大村藩の痘瘡罹患者に対する姥捨てに近い扱い方も、その非人間的な冷酷さを恐れるが、人痘法、牛痘法の普及と共に種痘山として受け入れられ、若者の通過儀礼を体験する場として変容して行くのは興味深い。

著者は後書きで「小著に記載した四六点の文学作品を通じて、当時の人々が如何に恐るべき痘瘡と闘い、且つ多くの犠牲を払ったか、その悲惨な歴史がおわかり頂ければ望外の幸せである」と記しておられるが、痘瘡というのは死をもたらす病、幸いにして命を取り留めても、終生、顔の醜形、皮膚の引きつり、手足の不自由さ、失明などにより、人々の人生にさまざまな陰影を落とした疾患であった。

広い商店の売り場に置かれた数々の商品を見ながら散策するような、読む側の知識、興味の方向、人生観等によっていかようにも楽しめる汲めども尽きない魅力あふれる著書である。乞うご一読。

（小田　泰子）

〔思文閣出版、〒六〇六―八二〇三京都市左京区田中関田町二―七、電話〇七五―七五一―一七八一、定価五〇〇〇円＋税〕

清水　寛　編著

『日本帝国陸軍と精神障害兵士』

わたしは「戦争と精神科医療、精神医学そして精神医学者」の主題でここ数年、精神医学史学会および十五年戦争と日本の医学医療研究会で発表をつづけており、また戦争中の精神病院および癩療養所での死亡率をしらべてきたので、清水さんのお仕事にはまえからふかい関心をもってきた。だが、埼玉大学教育学部教授であられた清水さんの論文は、主として『障害者問題研究』や『埼玉大学紀要教育学部（教育科学）』などに発表されてきたので、ごく少数のものしかよむことができずにいた。今回、清水さんが門下の細渕富夫さん、飯塚希世さんとかかれたこの領域の論文